

EULAR 2017 Madrid 参加報告

石川県立中央病院 腎臓内科・リウマチ科 鈴木 康倫

2017年6月14日から17日までスペインのマドリッドで開催された欧州リウマチ学会（EULAR）に参加してきました。会の数日前に海沿いのバルセロナへ寄ってから内陸のマドリッドへ移動しました。いずれも快晴で、食事・観光面とも申し分のない土地ですが、会期中マドリッドの気温はバルセロナ+10°C超えの40°C台を記録しました。巨大な会場では、ホール間の移動が全て屋外通路になっており、汗をかきながら各セッションを飛び回っておりました。今年はEULAR70周年であり、初日夜のセレモニーではEULARの歴史を振り返るビデオが上映されました。

学会の様子は会場で毎日配布される『EULAR Congress News』に加えて、学会終了後に配信された『The EULAR 2017 Report』

(http://www.eularcongressnews-digital.com/eularcongressnews/eular_2017_report?sub_id=ye5EtzZf91Meutm_source=EULAR+2018&pg=4#pg4) に記事としてまとめられていますが、両者の紙面トップを飾ったのが「Treat to target in axial SpA: reality or utopy?」というセッションです。したがって、EULAR全体で一番のトピックとして扱われています。ここでは当日の発表内容、特にexpertによって言及された本領域の今後の課題について記載します。なお具体的なT2Tの内容に関しては、会期終了後速やかに論文発表されており、詳細は本文を参照下さい(<http://ard.bmj.com/content/annrheumdis/early/2017/10/25/annrheumdis-2017-211734.full.pdf>)。

初めにドイツのJügren Braun先生が「The concept of treat-to-target」というタイトルで講演されました。T2Tの概念が最初に適応された疾患は糖尿病であり、その後関節リウマチへ適用されました。T2Tは慢性疾患に対する概念であり、脊椎関節炎において1. コントロールが悪いと重篤な合併症・障害に繋がる、2. 合併症は疾患の重症化と死亡に繋がる、ことが適用の前提であるとのことです。予後予測可能なoutcome measureが存在し、その低下が予後改善に繋がり、治療目標を達成し得る治療法が存在することが、脊椎関節炎においてT2Tの概念が成立する条件であると言います。

フランスのMaxime Dougados先生からは、「What are the challenges for applying T2T in axSpA?」として、課題が示されました。BASDAIですら実施率が低い現状において、T2Tを実践するためには、1. 明確なtargetの定義、2. Patient-reported outcomeの客観的評価（特に線維筋痛症合併例において）、3. 日常診療で測定可能なパラメーター（ASDASなど）、4. T2Tアプローチの有効

性を検証するための臨床試験実施、5. 明確な shared decision、の 5 点が必要であると述べられました。

最後に van der Heijde 先生から「**Treat-to-target recommendations in axSpA – update of the recommendations T2T in axSpA**」のタイトルで新たな T2T 作成の過程について講演がありました。脊椎関節炎領域における最初の T2T 論文は 2014 年に発表されましたが、当時 RCT は TICOPA study のみで、peripheral SpA に関しては論文ゼロだったそうです。その後のエビデンス蓄積により、ASDAS は syndesmophyte 形成と関連し、一方 BASDAI との関連は認められなかったことが判明しました。最近 5 年間のエビデンスは 5 つの recommendation として結実したと言います。今後の課題については、1. HAQ の役割、2. PsA に関する target の validation、3. Target を寛解、LDA に設定した場合の違い、を挙げられました。

本研究会では会員の先生方へ毎週脊椎関節炎関連の新着論文をレビューしてメーリングリストで共有しています。今後は target strategy による臨床試験論文が増加すると思われ、動向に注目したいと思います。

個人的には EULAR でシェーグレン症候群 (SS) グループをまとめているバルセロナ大学の Manuel Ramos-Casals 教授と同大学でお会いしてクリニックやラボを案内して頂いた上、会期中に開催された EULAR SS Task Force 会議に唯一の日本人として参加する貴重な機会を得ました。私の所属施設からも症例登録している 9000 人超の EULAR SS Big Data Project の進行状況、SS 治療推奨の作成過程を共有し、EULAR の内部を少しだけ体感できました。脊椎関節炎領域においても、海外では多くのコホートが作られており、日本からも多施設共同での臨床データを発信していくことが急務であると感じました。